

法助動詞 *can* と *may* の意味と用法

長谷川 瑞穂

要 旨

法助動詞は古英語の時代からさまざまな変遷を経て現在の意味と用法になっている。

法助動詞 *can* と *may* は現在では「可能性」「許可」の意味を共通に持っている。本論文では *can* と *may* がどのような歴史的変化を経て現在の用法に到ったか、また現在の *can* と *may* の用法はいかであるか。そして両者の用法にどのような違いがあるかを通時的研究、コンピューターを使ったコーパスによる研究、ファジィ集合理論による意味の関連性、筆者による ‘*Silence*’ を使った用例分析などから考察する。

1. はじめに

法助動詞 (modal auxiliary verb) の *can* と *may* は「可能性」(possibility) , 「許可」(permission) の意味を共に持っている。従来の統語論的, 意味論的, 語用論的アプローチではこの両者の違いが今一つはっきりしない。統語論, 意味論では書きことばに重点がおかれがちであり, 語用論的アプローチでは *can* と *may* の用法の微妙な違いが明確ではない。

本論文では *can* と *may* の意味と用法に関して... 2章では語源の意味と発達という観点から, 3章では J. Coates の話しことば, 書きことばの二つのコーパス (corpus) による資料分析とファジィ集合理論 (fuzzy set theory) による分析から, 4章では筆者の ‘*Silence*’ による用例分析と両者の比較という観点から...分析と考察を試みる。

2. *can* と *may* の語源の意味と発達

ここでは法助動詞 *can* と *may* の古英語期, 中英語期における意味と用法を調べ通時的研究の糸口を探る。まず OED に述べられている *can* と *may* の主な用法と意味は次の通りである。

Can

. As an independent verb.

†1. *trans.* To know.... 1000-1649.

2. *intr.* To have knowledge.... 1250-1875.

. With infinitive.

3. To know how (*to do* anything)..., to be intellectually able. 1154-1726.

4. To be able; to have the power, ability or capacity. 1300-1875.

5. Expressing a possible contingency. 1250-1816.

6. Expressing possibility : To be permitted or enabled by the condition of the case. 1542-1848.

(OED Vol. : pp.816, 817)

May

. As a verb of complete predication.

†1. *intr.* To be strong ; to have power.... 825-1430.

. As an auxiliary of predication.

2. Expressing ability or power.... 900-1857.

3. Expressing objective possibility, opportunity, or absence of prohibitive conditions 888-1903.

4. Expressing permission or sanction.... 1000-1852.

5. Expressing subjective possibility.... 1205-1875.

(OED Vol. : pp.499, 500)

can は元来 ‘to know’ を意味する他動詞でありその後自動詞としても使われた。さらに能力，可能性を表す用法も使われるようになった。一方 *may* は強い，力があるという意味の自動詞から比較的早く能力，可能性，許可を表す助動詞の性格を備えていった。次に *can* と *may* の古英語 (Old English : 以下 OE と略す) 期と中英語 (Middle English : 以下 ME と略す) 期の用法を詳しくみていく。

< can >

can の語源である *cunnan* は ‘to have learned, to have attained (to) knowledge’ の意味を持つ過去現在動詞 (preterite-present verb) であった。過去現在動詞とは過去形 (完了形) から発達しやがて現在形として用いられるようになった動詞のことである。多くの場合目的語を伴い他動詞として用いられいまだ助動詞的性格は現れていない。OE 期には *cunnan* の用法は少く 8 世紀に書かれ 1000 年前後に転写された *Beowulf* には 22 例しかない。そのうちの一例を挙げる。

(1180) Ic minne can / glædne Hrōþulf. pæt hē pā geogoðe wile ārum healdan. (I know my gracious Hrothulf, that he will honourably entreat our children.)

上の用例でも *cunnan* は ‘know’ の意味を持つ本動詞として用いられている。OE 期の *cunnan* の意味の中核は「知識」である。ME 期に入ると動詞の非定形が目的語になる用法が支配的となり次第に助動詞的性格を帯びてくる。しかしながら必ずしも常に非定形を目的語として伴うとは限らないので十分に助動詞化しているとはいえない。意味的には ‘know how to’, ‘be able to’ など現在の能力

の用法も出てくる。ME 期には *can* の用法は増え、Geoffrey Chaucer (?1340-1400) の晩年の作品 *The Canterbury Tales* には *can* の用例は414もある。まず能力の例を挙げる。

(V-600) Who kan sey bet than he, who kan do werse ? (who can say better than he, who can do worse ?)

動詞の非定形を伴い助動詞として使われている。また可能性を表す用法も出始めるが *The Canterbury Tales* から例文を挙げる。

(-1287) For who kan be so buxom as a wyf ? (For who can be so obedient as a wife ?)

ME 期までには許可以外の *can* の現在の用法は一通り現れたといえる。確かに時を経るに従い非定形を目的語としてとる用法は増大しつつあり助動詞として確立していくが、非定形以外を目的語とする本動詞的用法も少からず残っていた。

< may >

may の語源である *magan* は OE 期から非定形を伴うことが一般的で *can* よりもはるか以前に助動詞的性格を備えていたと考えられる。*cunnan* と同様過去現在動詞であり ‘to be strong’ ‘to have power’ の意味で肉体的能力を表すことが多かったが、能力一般を表す用法もみられた。*magan* は *cunnan* よりも OE 期によく使われ *Beowulf* には83例ある。

(277) Ic pæs Hrōðgār mæg / purh rūmne sefan ræd gelæran. (I [i. e. Beowulf] can give Hrothgar good counsel about this, with generous mind.)

上の例は能力を表している *magan* の例で現在の用法では *can* になる。*magan* はまた文脈により可能性や許可を表すことがあり現在の用法に近い用法が OE 期から表れていた。*Beowulf* より可能性を表す例を挙げる。

(2801) ne mæg ic hēr leng wesan. (I [i.e. Beowulf] may stay here no longer.)

ME 期に入るとさらに用法の多様化が進み、「可能性」、「許可」を表すことが多くなる。ME 期の *The Canterbury Tales* には *may* の用例は936もある。

(161) He may doon as hym laste (He may do as he likes.)

上の例文中の *may* は許可と解釈するのが妥当であろう。

OE 期と ME 期の *cunnan* (*can*) と *magan* (*may*) の使用頻度を比較してみると、ME 期に入り *can* の用法が多くなったことが目立っている。次に *can* と *may* が OE 期と ME 期で主にどのような意味で使われていたかをみることとする。

表 1 : *can* と *may* の意味の変化

		know	be able	be possible	be permitted
OE	<i>cunnan</i>		×	×	×
	<i>magan</i>	×			
ME	<i>can</i>	×			×
	<i>may</i>	×	×		
	<i>know</i>		×	×	×

can の本来の意味は本動詞の ‘know’ に、*may* の本来の意味の能力は *can* に…と意味のずれが生じている。*cunnan* は元来 ‘to know’ を意味していたが、非定形を伴う用法が進み ‘to be able’, ‘to be possible’ の意味を担いその意味範囲を広げていく。一方 *magan* はその本来の能力の意味を *can* に譲り代わりに ‘to be possible’, ‘to be permitted’ の意味に範囲を広げ ME 期には現在の用法の全てが表れている。そして現在では *can* は *may* の ‘to be permitted’ の領域にまで範囲を広げている。

3. J. Coates の *can* と *may* の分析

以前は Palmer (1979), Leech (1971) にみられるように *can* と *may* の意味を並列的に説明していたが、現在では多義性を持つ法助動詞のそれぞれの意味の間に関連性を認める考え方が主流である。J. Coates (1983) はコーパス (corpus) による資料分析とファジィ集合理論 (fuzzy set theory) により *can* と *may* の意味と用法を説明している。

Coates はまず書きことばには1,000,000語からなる Lancaster corpus を、話しことばには725,000語からなるロンドン大学の Survey of English Usage corpus を用いばう大な資料分析を行った。両コーパスにおける *can* の分布は次の通りである。

表 2 : 両コーパスにおける CAN の分布

	Permission	Possibility	Ability	Gradience	Sample Total
Survey	10	129	41	20	200
Lancaster	8	148	57	18	231

(J. Coates (澤田訳): p104)

表中 *gradience* は漸次的推移性という不確実な部分を表している。たとえば(1)のように、能力という中心の意味から可能性という周辺に広がる意味を表す場合がこれにあたる。

(1) All we *can* do is send some money to them.

(表2) からわかることは、話しことばにおいても書きことばにおいても *can* は「可能性」というどちらかといえば中立的な意味で用いられることが圧倒的に多いという事実である。可能性の一例を挙げる。

(2) I know a place where we *can* get a cheap bag.

(表2) からわかる通り2番目に多い用法は「能力」である。*can* の語源の意味が知識、能力であることを考えると、現在の用法に語源の意味が内在しているともいえる。

(3) I *can* walk all the way to the station.

「許可」の *can* の用法は増えつつあるとはいえ全体ではまだ少ない。

(4) *Can* I smoke in here?

次に両コーパスにおける *may* の分析は以下の通りである。

表3：両コーパスにおける *MAY* の分布

	Epistemic Possibility	Root Possibility	Permission	Quasi-subjunctive	Benediction	Indeterminate	Sample Total
Survey	147	7	32	0	1	13	200
Lancaster	143	53	14	7	1	18	236

(J. Coates (澤田訳): p156)

表中、*quasi-subjunctive* は「疑似仮定法」、*benediction* は「祝福」の意味であるが、これらの例は稀であることがわかる。表中の *epistemic possibility* とは認識的可能性、すなわち命題の真実性に対する話し手の自信の度合いを表す。両コーパスにおいてもこの用法が圧倒的に多い。

(5) Have you got a pen?

I *may* have one.

root possibility とは根源的可能性，すなわち文脈に客観的に可能にする状況が含まれている場合である。

(6) I'll tell you the truth so that you *may* make arrangements.

「許可」の例は *can* の場合よりずっと多い。書きことばの Lancaster の許可の用法の86%は3人称肯定の形である。

(7) A court within its discretion *may* impose a judicial beating for a second offence or over.

(7) の例でわかる通り，この場合の許可は 'have the authority and be allowed to' の意味で法廷など権威のある場所で使われることが多い。一方話しことばの Survey ではこのような例は稀でほとんど(84%)が "May I ..." の1人称疑問文である。

(8) *May* I read your message?

(表3) 中の intermediate は可能性と許可の不連続な線上にあるやや曖昧な場合で次の例のような場合である。

(9) If you want to come with your wife, you *may* do so.

Coates はコーパスの中のデータを分析した結果，法助動詞の意味を正しく記述するためにはカテゴリー的なアプローチと非カテゴリー的なアプローチを融合させる必要があると考えファジィ集合理論を用いた。ファジィ集合理論は最も中心的な意味を持つ「中心」(core)，中心からはずれて意味に広がりのある「はずれ」(skirt)，周辺の意味を持つ「周辺」(periphery) という3つの部分を持つファジィ集合によって表すことができる。

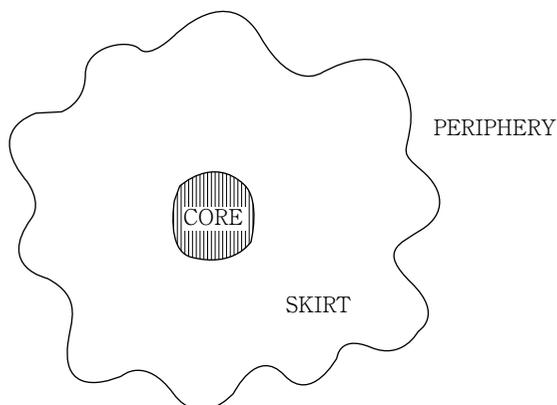


図1：ファジィ集合

Coates は *can* のファジィ集合を以下のように示している。

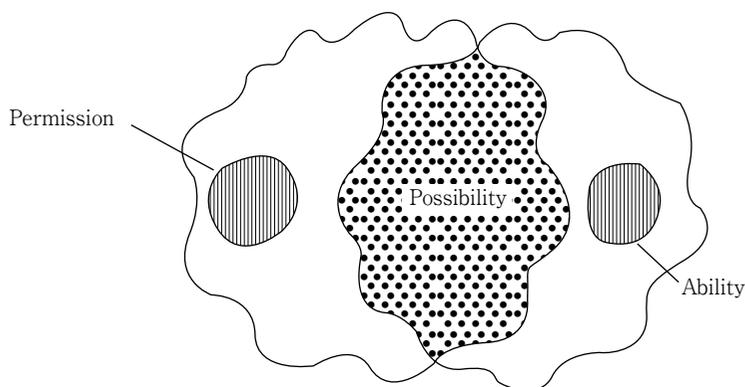


図2：can のファジィ集合図

can の意味は普通「許可」(permission)、「可能性」(possibility)、「能力」(ability)に分けられるが (Leech; 1971, Hermeren 1978), Coates の考え方によれば「許可」と「能力」が共に *can* の二つのファジィ集合の中心部分に位置し、この二つの集合の交わる部分が「可能性」であり周辺の領域である。

一方、*may* のファジィ集合図を Coates は次のように描いている。

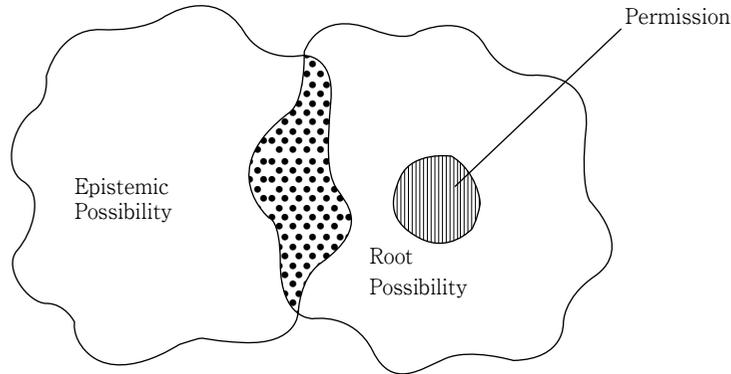


図3：may のファジィ集合図

根源的意味の中心部分は「許可」で ‘it is allowed for X’ の意味であり、周辺部分は「可能性」で ‘it is possible for X’ であるが、この二つの意味を厳密に区別することは不可能である。両者を分ける厳密な境界線は存在しない。認知的可能性は命題の真実性に対して話し手が自信を持ってはいないということを表すことが多く、二つのファジィ集合が交わるが、融合部分の例は少い。

以上の観察から J. Coates は次のような意味で法助動詞の意味と用法を詳しく掘り下げているといえる。

コーパスによる広範なデータを用いて現代イギリス英語の法助動詞の用法を統計的にわかりやすく示している。

書きことばと話しことばの2種類のコーパスを用いてスピーチレベルによる法助動詞の用法の違いに焦点をあてている。

ファジィ集合理論を用いて「漸次的推移性」や「認知的・根源的用法」を分析している。

4. *can* と *may* の比較と考察

現在では *can* の主な意味は「可能性」、「能力」、「許可」、*may* の主な意味は「可能性」、「許可」である。*can* と *may* は「可能性」、「許可」の意味を共通に持っているが、本章ではその用法にどのような違いがあるのかを考察する。

まず *can* と *may* の使用頻度を明らかにするために遠藤周作の「沈黙」の翻訳 ‘*Silence*’ から用例をまとめたのが(表4)である。

表4：Silence 中の *can* と *may* の分析

	可能性	能力	許可	曖昧	合計
<i>can</i>	171	45	4	14	244
<i>may</i>	25	/	3	4	32

(表4) からわかる通り現代英語では圧倒的に *can* の用法が多い。また *can*, *may* とも可能性の意味で使われることが断然多いこともわかる。

Coates は両コーパスにおける *can* と *may* の比較をしている。

ABILITY	ROOT POSSIBILITY	PERMISSION	EMPHATIC POSSIBILITY	EPISTEMIC POSSIBILITY
		7	32	147
41	129	10		

図4 : CAN と MAY の比較 - Survey の数字

(J. Coates (澤田訳) : p123)

ABILITY	ROOT POSSIBILITY	PERMISSION	EMPHATIC POSSIBILITY	EPISTEMIC POSSIBILITY
		7	14	143
57	148	8		

図5 : CAN と MAY の比較 - Lancaster の数字

(J. Coates (澤田訳) : p123)

(図4) でわかる通り話しことばの Survey においては *may* と *can* の用法はほとんど重なるところがない。許可と根源的可能性においてわずかな重なりがみられる程度である。一方書きことばの Lancaster においても重なりは少く許可にわずかに、根源的可能性においてやや多く重なりがみられる。コーパスにおける資料分析の結果 Coates は *can* の可能性は根源的であり、*may* の可能性は認知的が主であるが根源的可能性も見受けられるとしている。この Coates の考え方は Palmer (1979 : 30), 澤田 (1995 : 219)らの可能性は全て認知的であるとする従来の考え方と異なる。しかしそれぞれの意味の間に関連性を認め、可能性に段階性があるという立場に立つと Coates の考え方は納得がいく。

can の根源的可能性とは客観的情勢から起こる可能性が高い...・ということである。

(10) We *can* make coffee like this upstairs.

一方 *may* の可能性は認知的即ち命題の内容に対する話し手の自信の度合いを示す例が多い。

(11) I *may* have put them down on the table - they are not in the door.

(11)のような認知的可能性の *may* は主観的でありこの場合に *can* は用いることができない。前述したようにコーパスの分析によれば話しことば、書きことばの双方において *may* の可能性の用例は圧倒的にこの認知的用法が多い。*can* と *may* の重なる根源的可能性の例として Coates は次の例を挙げている。

- (12) I *may* / *can* come tomorrow.
(Everything's arranged.)

(12) の例では話し手が来るのを妨げる要因はなく明日来る可能性が高い。一方認識的可能性の *may* の場合は起こる可能性は50:50であるとしている。

- (13) I *may* come tomorrow.
(But I'm not sure yet.)

一方 Leech (1971) は *can* と *may* の可能性について次のように述べている。

can の可能性 (possibility) < very common >

can は 'theoretical possibility', つまり論理的に起こる可能性一般に用いられる。

- (14) Even expert drivers *can* make mistakes. (= It is possible for even expert drivers to make mistakes.)
15) The road *can* be blocked.
(= It is possible for the road to be blocked.)

can の場合「まだ起こらない」というニュアンスを表す *to* 不定詞を用いて書き換えている。

may の可能性 (possibility) < common >

may は 'factual possibility' つまり事実に基づく可能性がある場合に一般に用いられる。

- (16) Careful, that gun *may* be loaded. (=It is possible that gun is loaded.)
(17) The road *may* be blocked.
(= It is possible that the road is blocked.)
(Leech 1994, p81)

may の方は起こる事実を強調する *that* 節で書き換えている。

Leech は *may* の方が事実に基づいて起こる可能性が高く, *can* の方は論理的可能性で起こる可能性は低いとしていて, Coates の考え方とずれが生じている。しかし両者に共通の点は *can* の方が客観的な用法で *may* の方が主観的であるという点で可能性の度合いに関しては意見のくい違いがあるものの基本的には似ている。可能性の程度に関してはどちらの考え方がより正しいのか, 今後用例を数多く検討して考察を続けていきたい。

次に許可の *can* と *may* に関して Leech (1971) は *can* よりも *may* の方が形式的で丁寧であると述べている。この点に関しては Coates も同意見で学者による意見のくい違いは余りないように思われる。Coates の両コーパスの分析によれば *can* の許可の用例は書きことばにおいて10例、話しことばにおいて8例、*may* の方は書きことばにおいて32例、話しことばにおいて14例観察されている。*can* の方は両コーパスにおいて用例は少くあまり差はないが、*may* は書きことばにおいてより多く使われているが、*may* の本来の用法が形式的であらたまった場面で使われるという点から考えると当然のことといえる。*can* は規則や統制により許可される場合に用いられることが多い。

(18) You *can* park on the street in this town.

従って *can* の許可の場合話し手の権限が示されることは余りない。一方 *may* の方は書きことばにおいてよく使われる 2 人称、3 人称肯定文においては話し手の権限を、話しことばでよく使われる 1 人称疑問文においては話し手の謙虚な気持ちを表す。

(19) You *may* buy some sweets, John.

(20) *May* I apply for this job?

can と *may* の許可の用法は *can* は上下関係のあまりない親しい間柄で、*may* の方は上下関係のある場合や格式ばった場合に使われるとされてきた。しかし Coates のコーパス分析の結果、*may* の 2 人称、3 人称肯定文の形はほとんど格式ばった書きことばにおいて使われ、話し手の謙虚さを表す *May I...?* の形が話し言葉でよく使われるということが明らかになった。

5. おわりに

2 章では通時的な見地から *can* と *may* の根源的意味とその変遷をみてきた。時間の流れの中で常に *may* は *can* に先行している。先行して *may* が獲得し包含してきた意味、用法を後に続く *can* が吸収していく。しかし、突然意味、用法が受け渡されるのではなく、徐々に変遷していく。現在でもなおこの流れは続き、*may* の用法を *can* が吸収し続けている。*can* に関していえば一番古い「知識」の意味は本動詞の 'know' に譲りつつも、語源的に古い「能力」の意味は現在でも残している。しかしながらより中立的で曖昧な「可能性」の意味を増大させている。また本来 *may* の持っていた「許可」の領域にまでその範囲を広げつつあるが、許可の用法はさほど多くない。一方 *may* に関しては、本来の中核的な「能力」の意味は *can* に譲り、歴史的に古い「許可」の用法は現在でも残っているがその用法は減少しつつある。*may* もやはり中立的で曖昧な「可能性」の意味を現在では一番多く残している。

3 章では Coates のコーパス言語学とファジィ集合理論による *can* と *may* の分析を概観した。コ

ーパスによる用例分析は現代イギリス英語の実態を正確に、緻密にみせてくれる。今後のコーパス言語学の発展が言語学研究に新しい方向を与えてくれるのは間違いない。またファジィ集合理論では意味の関連性という観点を取り入れ、従来の用例分析で曖昧だった点が解明できている。

4章では「可能性」、「許可」の比較を行ったが、*may*の方が話し手の気持ちが関与している認識的用法、*can*の方が客観的状況による根源的用法が多いことが明らかになった。形式度の観点からいえば *may*の方が形式的であり *can*の方がぐだけた表現である。現代英語では *can*の使用の方が多いことを考えると、現代人は客観的で、あまり形式ばらない表現の方を好むということになるであろうか。また *can* と *may* は「可能性」「許可」という共通の意味を持っているが両者が同じように使われるのではなく用法にそれぞれ制約があり重なる部分が少いことも明らかとなった。

ことばはさまざまな形で変化している。その絶えざる変化を正確に捉え、緻密に分析することに歴史言語学、新しい理論、コンピューターを使ったコーパス言語学などが役立つ。

引用文献

- Coates, J. (1983) *The Semantics of Modal Auxiliaries*, Croom Helm, London
(澤田治美訳 1992 「英語法助動詞の意味論」, 研究社, 東京)
Leech, G. N. (1994) *Meaning and the English Verb*, Hitsuji Shobo
Oxford English Dictionary Vol. , (1989), Clarendon Press, Oxford
Pollard, A.W. et al. eds. (1953) *The Works of Geoffrey Chaucer*, Macmillan, London
Wrenn, C. L. ed. (1953) *Beowulf*, Harrap, London

参考文献

- Endo, S. (translated by Johnston W.) (1977), *Silence*, The Kawata Press, Tokyo
Hermeren, L. (1978) *On Modality in English ; A Study of the Semantics of the Modals*, CWK gleerup, Lund
小野茂(1969) 「英語法助動詞の発達」 研究社, 東京
Palmer, F. R. (1979) *Modality and the English Modals*, Longman
Sawada, H. (1995) *Studies in English and Japanese Auxiliaries*, Hitsuji Shobo, Tokyo